

アッシジの聖フランシスコ (2)

はじめに

6月にイタリアに旅をして聖フランシスコのゆかりの場を訪ねその生涯を深く知りたいと思いました。連載の日本史Bを中断しての挑戦です。聖フランシスコの研究は夥しくあり、日本でも大正時代から始まっており先駆者は宗教学者の姉崎潮風のようなようです。彼は聖フランシスコの天真爛漫性を強調しており、「彼、聖フランシスコの人物は一言にして尽くせば天真爛漫、小児の如き心をもって一生通した人である。身を神に任せようとした時、親の怒りに触れて着物をも脱ぎ捨て丸裸になって己の信仰を貫いたその心は清さにおいては小児の心であり、強さにおいては偉人の精神である」と喝破されています。天国に入る幼子の心をベースにして「俗」から「聖」を時間をかけて転換していく過程で揺れ動く心理が24歳（1206年）から27歳（1209年）にかけて観察することができます。

フランシスコは民族、国家、文化、宗教、思想、時代を超えて多くの人の心を惹きつけ、尊敬を受けています。その中でも「捨」の精神は日本とほぼ同時期に生じていることの歴史の同時性として興味深いものがあります。日本では浄土宗の開祖法然（1133~1212）、臨済宗の栄西（1141~1215）、小鳥に説教をしたと言われる明恵（1173生）が1206年に京都の高山寺を建立しています。親鸞（1173~1262）、道元（1200~1253）、日蓮（1223~1282）の活躍があります。特に「捨てることは任せること」と行動宗教の時宗の一遍（1239~1289）との同時同質性が見逃せないところです。今回は決定的な回心の過程を見ていきます。参考文献からの引用が多くなりますので文体が少し変わります。

1206年の出来事

サン・ダミアノ聖堂で祈っていたとき「フランシスコよ。崩れようとしているわたしの家を修復しなさい」との主のお告げを聞いて、彼はその時、持っていたあり金全部をサン・ダミアノの老司祭に寄付しようと申した。

「どうぞこのお金で油を買い、十字架像の前の常明灯を欠かさずともしておいてください。油がなくなったら、またそう言ってください。なんとかいたしますから」（常明灯は今も周囲の4つの町の協力で続いています。起点を大切に守っていることに感心します）

然し、老司祭は快受はしていない。フランシスコは熱心に説得したので渋々受諾をしたが内心は迷惑感を抱いていた。老司祭はフランシスコの過去の行状を知っており、成り上がりの商人の息子の道楽であるとしか考えられなかった。

フランシスコは父から逃れるために老司館近くの洞窟（岩穴）の使用を願い出、それは承認を得ることができた。

サン・ダミアノ聖堂の修復再建をするには更に多くの大金が必要であることを知ったフランシスコは父がプロバンスに商用に出かけている間隙をついて家から多くの織物を持ち出し自分の馬に乗せ17km離れているフォリニョに出かけ自分の馬も売り徒歩で戻り大金をサン・ダミアノの老司祭に聖堂の修復に使って欲しいと言って聖堂の窓から大金を放り込んだが、この二度目の寄付を老司祭は拒絶し、フランシスコの父からの返還請求があることを予想して手を付けずに保管していた。

フランシスコは司祭館近くの岩穴にこもり「祈り、瞑想、断食」をしていた。商用から戻った父は息子の行動に激怒して息子を探しにサン・ダミアノに行くも見つからず、老司祭は保管していた大金をその父に返しこの一件は落ち着いたかにみえた。

フランシスコの瞑想は「人類の罪のために十字架につけられたキリストの生活」を思い、涙し、いたくため息をつきながらの祈であった。過去の行動のむなしさを嘆き、罪を悔い改めるために聖書に導かれ、パウロに似たところがあるように彼もパウロの書簡「ローマ人への手紙」を精読した。

1207年の出来事

4月のある日、アッシジの子ども達がひとりの^{きちがい}狂人を追いかけているのを父が聞きつけ見に行く^{きちがい}とそれはやつれたみすぼらしい息子であった。恥ずかしい服装、髪をもじゃもじゃにし、目はやつれて落ち込み、子ども達のいじめで傷つき、投げつけられた泥でよごれていた。父は悲しさと恥ずかしさと怒りのあまり、息がつまりそうになった。野獣のようになって人の群れに飛び込み、だれこれかまわず殴り蹴り散らし、息子をつまえて家に連れもどし暗い地下室に監禁した。

数日後父はいつものように旅に出ると母のピカは彼を解放しフランシスコはサン・ダミアーノの避難所に戻ることができた。

戻った父が激怒し、今度は裁判に訴えた

「もう自分の子どもではない（廃嫡＝相続権の剥奪）儲かったお金を返せ」と市の裁判所に告訴した。フランシスコはこの争いには信仰が絡んでいると抗告（不服をいうこと）したので、裁判は司教のもとで行われることになった。フランシスコの本気な求道心を認めて

いたグイド司教は神に仕えるつもりなら父にお金を返すように忠告した（p 53）

アッシジの人々は富豪の商人となった父と気狂いになった息子との面白い裁判を見物しようとして広場に集まった。最初に声を発したのは父親でも司教でもなくフランシスコで、目を輝かせて立ち上がり言った。

「司教様、父のものである金ばかりでなく、この服も返します」



そして法廷の後ろの部屋に入り全裸になり毛の苦行衣だけを腰にまとい他の衣類を全部抱えて出てき、全会集に向かって言った(p53)

(ブラザー・サン・シスター・ムーンでは会衆の前で全裸になっている)

「皆さん、申し上げることをお聞きください。今までわたしはピントロ・ディ・ベルナルドネを父と呼んでいましたが、今、彼にその金と彼から貰った衣服を全部返しますから、もう今からは父ピエトロ・ディ・ベルナルドネとは言わずに、天にまします我らの父というでしょう！」この光景はジョット絵の中でも最も有名なもので、緋色の織物と上等な麻の衣類を父の足元に置きその上にお金を積んで返した。居合わせた人々はいたく感動し、多くの人々はワァーと泣きだし、司祭も目に涙を浮かべた。父親だけが感動しなかった。冷やかな顔つきで彼はかがんで衣類と金を取り怒って真っ青になってむっつりとして立ち去った。すると司祭はフランシスコに歩み寄ってヒダの多いマントを拡げて彼を包み抱きしめた。(ガイド司教はその後もフランシスコの面倒を見る)

フランシスコはその時から、予てからの念願が叶って、全くの神の司祭の僕、教会の人となった。こうしてピエトロ・ディ・ベルナルドネの息子が全てを捨て十字架を担いイエスに従うという福音書の言葉を文字通り実施した。1207年の4月のことだった。

騒ぎがおさまった後、司教は庭師の古いマントをフランシスコに手渡した。彼は喜んでもらい受け近くにあった石灰でマントの背に十字架を書き着服してグッピオにいる友人を訪ねるべく日没迫る頃に出発した。途中、森の中で「お前は、誰だ」と追いはぎに襲われるとフランシスコは平然として「大王様の使者です。あなた方と何の関わりがありますか？」と応えた。追剥ぎ達は背の十字架を見て哀れなこの男からは何も取れるものはないと判断したらしく「百姓め、そこに寝ている。使者などとぬかしおって」と叫んで手足をひつつかんで残雪の残る谷間に彼を投げ落とした。フランシスコはやっとの思いで雪深い谷からはい上がり前のように神の賛歌を歌いながら更に山を越えて歩いた。その日は小さな修道院に泊めてもらい数日後グッピオの友人をた訪ねた

そして、粗末な長衣に革帯をしめ靴を履き、手には長い杖を持つ隠修士の姿となった。

その後の日時は不確定だがハンセン病院に住み、その患者の足を洗い、膿を出したり、傷に包帯をし、時には接吻をさえしたという。

その間もサン・ダミアノ聖堂の修復を始める時を考えていた。

「ある日のこと彼はそこに現れた。神に課された聖堂の修復の仕事を始めためであった」このある日は推定が必要で、父との決別から半年は経過していたと思われ、1207年12月又は1208年始めの雪の降る日であったと推定します。



1208年の出来事(1)

おおよそ半年アッシジを離れている間に色々な噂が流れていましたが、ある日のフランシスコの出現に面食らったのがサン・ダミアノ聖堂の老祭司で迷惑千万という顔相であったようです。ともかく、フランシスコは修復にとりかかった。然し、資材を買うお金はなかった。彼が資材を買う為にとった行動は隠修士の姿のまま旅芸人ようになって、昔、覚えた「吟遊詩人」の真似をして人々に歌を聞かせ、終わると「石を一つ下さるお方は天国で報いを一つ受けます」と言い回った。始めは噂の男が戻って来て気狂いが興じて大袈裟なことを言い始めたと言ったが、その真剣さ本気がアッシジの人々の見方を変え始め、彼は一山の石を集めるのに成功し、それを担いで運んで、歌を歌いながら自分でレンガや石を積み上げていった。立ち止まって見る人には「こちらに来て、ダミアノ聖堂を建て直すのを手伝ってください」と呼びかけた。熱心に犠牲を捧げる姿を見てサン・ダミアノ聖堂の老祭司は感心して夕食の用意をして感謝の意を表した。

町の人々の善意によって修復は順調に進んだ。ある日のこと彼は老祭司の親切を受けることは自分が求める使徒のような清貧にはならないと感じ、翌日は、アッシジの昼の鐘が鳴り人々が食卓につくとフランシスコはさっそく鉢を持って街の家々を周り始めた。一軒一軒回ってみる

と何か恵んでくれる家が多かった。2～3杯のスープ、いくらかの肉のついた骨一切れのパン2～3枚のサラダ葉っぱその他色々。物乞いが終わると鉢は一杯だったが、それこそ食べられそうにもないごたまぜの料理だった。犬の餌さながの鉢を覗き込み、吐きそうになるのをこらえて最初の一口を飲んだ。するとハンセン病人に接吻した時のような気持ちになった。彼の心は甘美な聖霊に満たされ、こんな美味しい御馳走を食べたことがないようにおもわれた。彼は小躍りして戻り老司祭にこれからは自分で食事をします(祭司の夕食を断った)フランシスコの清貧の道が又一段と清められた瞬間であった。

レンガ積みの技術は若い時の城壁作りに参加した時に習得していた。乞食はローマで体験済みであった。

サン・ダミアノ聖堂の仕事ははかどった。修繕ではあったが落成祝いとして聖堂の主祭壇の常明燈の油をたっぷりと得たいと思ったフランシスコは、アッシジの街を巡り歩いたが、ままならず、旧友の家に行った。その時宴会がたけなわだった。すると勇気を失った。父に反抗し、森の追いはぎを恐れなかった彼が、旧友達の前に出るのをためらった。彼はその家を二三歩行き過ぎたが臆病を恥じてとって返し、友人たちの前で自分の弱さを告白し油を神の愛ゆえに恵んでくれるように願った。喜び溢れる寄付を受けることが出来た。

またしても自分の弱さを乗り越え使徒的生き方への道を確認なものにしています。1208年はサン・ダミアノ聖堂ばかりでなく、サン・ピエトロ聖堂の修復とポルチウクラ聖堂の修復に精を出し多くの協賛者と支援者を得て狂人から聖者への道を歩いていた。

1208年の出来事(2)

1208年2月24日、自ら修復したポルチウクラ聖堂の早朝ミサに参列しそのときに新しい命令を主から聞いた。それは司祭が朗読したマタイによる福音書10章7-13節のみ言葉であった。

「行って『天の国は近づいた』と宣べ伝えなさい。

病人をいやし、死者を生き返らせ、らい病を患っている人を清くし、悪霊を追い払いなさい。だだで受けたのだから、だだで与えなさい。帯の中に金貨も銀貨も銅貨も入れて行ってはならない。

旅には袋も二枚の下着も、履物も杖も持って行ってはならない。働く者が食べ物を受けるのは当然である。

町や村に入ったら、そこで、ふさわしい人はだれかをよく調べ、旅立つときまで、その人のもとにとどまりなさい。

その家に入ったら、『平和があるように』と挨拶しなさい。家の人々がそれを受けるにふさわしければ、あなたがたの願う平和は彼らに与えられる。もし、ふさわしくなければ、その平和はあなたがたに返ってくる」

(新共同訳より引用)

このみ言葉がフランシスコにとっては神の啓示となった。回顧録によると「いと高い者ご自身がわたしに、わたしが福音に従って生きるべきことをお示しになった。主はわたしに主の平和を与えられるようにと言う挨拶をお示しになった」と記されている。彼はそれを受けて「これがわたしのしたいことです。できるだけ、そのとおりに生きたいのです」と興奮して叫んだ。

かくして、使徒にならって生きること、余計な物は持たず、この世の心配を捨て、心で歓喜をあげながら「悔い改めよ。天国は近づいた」、「主の平和が与えられるように」と呼ばれる使命を心底から自覚した日となった。(悔い改めと平和の福音の告知者)

その日、聖堂を出るや、彼は靴をぬぎ、杖を捨て、寒さを凌ぐマントを脱いだ。帯の代わりに縄を腰に巻き(結び目は三つという説もある)その地方の百姓の着るような頭巾のついた長い褐色がかった灰色の上っ張りを着、はだしで使徒のように世に出て行った。



「聖フランチェスコ」(画:フランシスコ・デ・スルバラン、1658年)

その日から、又々異様な光景がアッシジの町に見られるようになった。町のここかしこの広場や通りにその姿が現れ「主の平和が与えられるように」と挨拶し大勢の人が集まるとはだしで階段か石の上に乗って説教をはじめた。

あとがき

今回は回心のダイナミズムとなる3年間をヨルゲンセンの著を主に引用して記しました。

8月は誕生月であり、平和の集いのある月であり、故人を偲ぶ月でもあり、台風の影響下に6回も空を飛び回りました。この原稿は殆ど上空で書きました。若い人達の将来の幸せを願い行動し多くの達成感を味わうことが出来たよい月でありました。1941は12月迄延期します。